

RUBeC 演習に参加して

白井 宏毅

Koki USUI

数理情報学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は、2016年8月13日から29日までの期間、龍谷大学の留学プログラムのひとつである「RUBeC 演習 I」に参加しました。約2週間の間、アメリカ合衆国カリフォルニア州のバークレー市にある Jodo Shinsyu Center にて、英語のライティングとプレゼンテーションスキルについて学習しました。また現地の企業 Thermal Technology 社、並びに龍谷大学の協定校である UC Davis を訪問したことで、海外の企業・大学の様子についても学ぶことが出来ました。

2. RUBeC 演習 I に参加した目的

私がこのプログラムに参加した目的は、国際学会での発表を目的として自身の研究内容を英語で執筆する力をつけ、英語でのプレゼンテーションスキルの向上を図るためです。また2週間の間、現地の一般家庭で生活するホームステイを通じて海外生活を経験し、海外の文化を学ぶことにより私自身の視野を広げてみたいと思っていたためです。さらに、ライティングやプレゼンテーションに関する授業の他に現地の企業や協定校への訪問も実施されており、こうした場所に訪問できる数少ない機会だと思い、本演習に参加しました。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティングスキル

授業はテクニカルライティングとプレゼンテーションスキルの2つに分けられ、平日の午前はテクニカルライティングのクラスでした。テクニカルライティングの最終目標は、事前に提出した英語で書いた論文の概要を正しい英語に書き直すということ

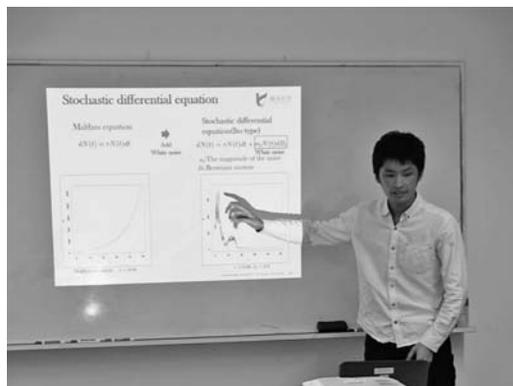


図1 英語で確率微分方程式についての研究発表をしている様子

した。

テクニカルライティングのクラスでは、英語の文法について学習しました。冠詞である“a”, “an”, “the”の違いや、単数形、複数形、時制、前置詞などの基本的で間違いやすい文法です。授業は基本的に全て英語で進められ、質問をする時も英語を使わなければならないため、学んだ事をすぐ活かすことが出来ました。

3.2 プレゼンテーションスキルクラス

プレゼンテーションスキルのクラスは平日の午後に行われました。この授業の最終目標は英語の研究発表を行える力を付けることでした。一般的に日本で行われる英語の授業は“話すこと”に重点を置いていません。そのため、ネイティブからすると日本人の英語は違う意味の単語に聞こえてしまうことが多くあるみたいです。こうした問題を改善するためにこの授業では英語の発音やアクセントの学習が主になっています。また、発表するとき重要である分章の区切り“chunk”の学習やボディランゲージなど発表の時に大事なポイントも同時に学習しました。最後の授業では全員が約6分30秒の持ち時間を与えられ、英語を使った研究発表を行いました。

4. 企業・協定校訪問

1週目の水曜日には SPS（放電プラズマ焼結）装置を製造販売している企業を訪問し、SPS の仕組み、製造工程を見学しました。2週目の水曜日には龍谷大学と協定を結んでいる“UC Davis”を訪問しました。

4.1 Thermal Technology Company

私達が訪問した企業は Thermal Technology 社といい、高温を利用した製品加工する機器の製造に取り組んでいる企業です。特に力を入れているのが SPS であり、実際に SPS を使用している所を見学しました。SPS は電流・電圧を使用した通電加熱によって物質の加工を行うものであり、その温度は 1000 度を上回ることが可能です。SPS の利点は加熱・冷却の速さにあり、通常の機器では加熱・冷却に約 4 時間かかるところ、SPS を利用するとわずか 15 分で最高温度に達することが可能で、15 分で冷却が可能です。この SPS 装置の製造を行っているのはアメリカでたった 2 社しかなく、その内の 1 社が Thermal Technology 社です。

4.2 UC Davis

UC Davis はアメリカ合衆国の州立大学であり、UC はカリフォルニア大学ということを示し、Jodo Shinshu Center の近くにある UC Berkeley を含む 10 校存在します。UC Davis には農学・環境科学部、生物科学部、工学部、教養学部の 4 つの学部が存在します。

私が UC Davis を訪問し、まず感じたことはその敷地の広さです。一般的な日本の大学は広いと言ってもキャンパスの端から端まで 20 分足らずで歩け



図 2 現地の先生と参加者の集合写真

る距離です。しかし、UC Davis の敷地は 22 km²にも及び、キャンパスの端から端まで 20 分で歩くことは不可能です。キャンパス内の施設も非常に充実しており、ボーリング場や著名な音楽家を招いて演奏会が開かれる講堂など娯楽施設も存在しています。キャンパスの一部を案内してもらった後は工学部の研究室を見学しました。その研究室では地震の研究をしており、遠心分離機を使い地震を実際に発生させシミュレートするようでした。一番大きな遠心分離機は半径 9 m にも及びその巨大な機器が 1 秒で 1 周近く回るのだからその規模の大きさがわかると思います。現地の大学院生は研究に熱心に取り組んでおり、研究意欲の高さを感じました。

5. おわりに

この 2 週間を通じて改めて、英語を学習する事の大切さ、異国の文化を学ぶことの大切さを実感しました。また、英語を学習したことにより、国際学会に参加する意欲が高まりました。英語で自分の意思を伝えられない悔しさをこの 2 週間で覚えたので、より円滑なコミュニケーションが取れるように日常的に英語の学習を続けていきたいと思いました。